聖　書：コリント人への手紙第一 2：1〜5
説教題：十字架のキリストのみ
日　時：2022 年 1 月 30 日（朝拝）

パウロは今、コリント教会の分派の問題を扱っています。1 章 12 節にあったように、彼らは「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言って、互いに争っていました。これはこの世の知恵や雄弁術を誇る当時の文化のただ中にあったコリント教会のメンバーが、そのこの世の価値観を教会の中に持ち込んでいたからであるということをパウロは述べています。そしてそれが大きな問題であることを、「この世の知恵」と「神の知恵」はいかに異なるかを示すことによって述べようとしています。まず 1 章 18 節以降では福音そのものを取り上げました。キリストの十字架を世はどう見るか。世はキリストの十字を愚かと見ます。これに嫌悪感を抱き、これを蔑みます。しかし神はその十字架を通して救いのみわざを進めます。ですからこの世と同じ道を行こうとすることは神の道から外れることを意味します。2 つ目に 1 章 26 節以降では、コリント教会のメンバーにパウロは目を向けさせました。彼ら自身、この世の基準で見れば愚かな者、弱い者、この世の取るに足りない者や見下されている者たちが多数でした。そんな者たちを神は救っています。この世の知者や身分の高い人は多くありません。ですからこの世の価値観に立った教会を作り上げようとしても、それは神のみわざと一致しないことになります。そして 3 つ目に今日見る 2 章 1〜5 節でパウロは宣教者である自分自身を取り上げます。ここにもこれまで見て来たのと同じ原則が当てはまります。すなわち神の知恵はこの世の知恵と異なること、神の方法はこの世の価値観をひっくり返すものであるということです。

1 節でパウロは「兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。」と言います。パウロのコリント宣教は第 2 回世界伝道旅行で行われ、使徒の働き 18 章にその様子が記されています。この 1 節において福音が「神の奥義」と表現されています。奥義と言うと、ある特別のエリートだけが知ることのできる秘儀と私たちは思うかもしれません。しかし聖書では、長い間隠されて来たが今やキリストにあって明らかにされた救いのことを指します。人間の予想や期待を越えてキリストの十字架においてついに明らかにされた神の救いのことです。このメッセージに従順に耳を傾ける人はすべてこの奥義を知ることができます。クリスチャンが今やみな知っている福音のことで

す。パウロはこれをすぐれたことばや知恵を用いて伝えなかったと言います。すぐれた言葉を用いないからと言って、いい加減な言葉を使ったとか、品のない言い方をしたという意味ではありません。また知恵を用いなかったからと言って、よく考えずに話したということでもありません。これらの言葉が指しているのは、コリント人たちが誇り始めていた当時のギリシャ世界で称賛された雄弁術とか巧みな話し方のことです。ですからすぐれた言葉とは人々を感心させるような言葉を次々に用いること、より高尚な表現を用いること、内容以上に聞く人々をその言葉で圧倒し、魅了するような話術のことです。また知恵とはギリシャ世界で知恵深いと認められるような哲学的表現のことです。パウロはそれらを用いませんでした。言い換えれば、そういった人間的技法、テクニックにより頼まなかった。

それは 2 節のパウロの決心と関係していました。2 節に「なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。」とあります。彼がこうしたのは十字架につけられたキリストを伝えることこそ神の方法であり、また 1 章 17 節で見たように、この世のことばの知恵によってそれを語ろうとするとキリストの十字架を空しくしてしまうからです。この世は十字架を愚かと断じます。ですからそんな世に認めてもらえるように、評価されるように、称賛を勝ち取るようにと心を配ると、いつしか十字架の要素を弱め、これをできる限り取り除く方向に進まざるを得ません。この世に迎合しつつ十字架を語ることは不可能なのです。どっちかの道を選ばなくてはなりません。ですからこの世の知恵の言葉にすり寄ろうとせず、十字架につけられたキリストを真正面から語ろうとしたと言っています。ここで注目に値するのは「十字架につけられたキリストのほかには、何も語るまい」ではなく、「何も知るまい」と決心したと言われていることです。つまり口から出すことばだけの問題ではなく、その心の中の思いについてパウロは表現しているということです。パウロはコリント滞在中、十字架につけられたキリストのことだけをいつも心に覚え、これに関心を集中し、これを絶えず黙想し、これだけを話そうとした。これは何もコリント滞在時の独特な方針ではなく、他の地域でもパウロはいつもそうでした。ガラテヤ人への手紙 3 章 1 節 :「ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、云々」。同 6 章 14 節 :「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。」　ですからこれはパウロの一貫した姿勢でした。しかしこのコリントはギリシャの大商業都市であり、この世

の知恵や知識を高く評価・称賛する世界です。そこでは他の地域よりもさらに十字架の福音が人々から愚かと断じられる激しい戦いが予想されます。パウロ自身もその中で揺さぶられ、その力に流されそうになる誘惑があり得るでしょう。ですから普段持っている姿勢を一層堅持するために、固い決心をもってこの町に入り、それに沿った生活と働きをしたと彼は証ししているのです。

さて語るべきメッセージは十字架につけられたキリストであるということにパウロの思いは定まっていましたが、それを取り次ぐ彼自身の状態はどうだったのか、それが 3 節以降に記されています。3 節に「あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。」とあります。これは具体的にどういうことだったのでしょうか。いくつかのことが考えられます。ある人はこれはパウロの肉体的な弱さ、この時の健康状態と関係があるのではないかと考えます。ガラテヤ人への手紙 4 章 13～14 節にこんなパウロの言葉があります。「あなたがたが知っているとおり、私が最初あなたがたに福音を伝えたのは、私の肉体が弱かったためでした。そして私の肉体には、あなたがたにとって試練となるものがあったのに、あなたがたは軽蔑したり嫌悪したりせず、云々」と。そしてコリント教会宛てに書かれた第二の手紙 12 章 7 節には有名な「肉体のとげ」の話が出て来ます。そのことではないかと。またある人は第二次伝道旅行でヨーロッパに渡って来てから迫害続きだったことと関係することではないかと見ます。最初の宣教地ピリピでは牢屋に入れられ、鞭で打たれ、次のテサロニケでは迫害によって追い出され、隣町ベレアで宣教していた時もテサロニケから迫害者たちが追いかけて来て追い出され、コリントに来る直前のアテネでは知識人たちに冷笑されました。そして一人さみしくこのコリントにパウロは乗り込んで来ました。そうした彼の精神状態を反映した言葉ではないかと。しかしおそらく最も良いと思われるのは、先に述べたことも含めて考えることも可能と思いますが、コリント宣教を前にしての恐れおののきということです。このギリシャの大都市で果たしてどうやって神の福音の宣教ができるか。パウロは神から福音宣教の任務を与えられてこの地に立っています。しかし目の前にある課題の大きさを思う時、自らのあまりにもの小ささを思わずにいられなかった。誰がこの働きをなし得ようとかと畏れ震えずにいられなかった。Ⅱコリント 2 章 16 節：「滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。」　この任務の大きさを思い、押しつぶされそうな気持ちとの戦いがあったということです。彼がコリ

ントで恐れを抱いていたことは使徒の働き 18 章 9〜10 節に記されている主の言葉からも伺えます。ある夜、主が幻によってパウロに現れて言われました。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」「恐れないで」とまず主が言われたことからして、パウロがこの時、ある意味で恐れに取りつかれていたことが伺えます。彼はそのように絶えず自信に満ちている人ではありませんでした。むしろ大きな課題を前にして自らの小ささを思い、恐れおののく人でした。

その彼がコリントの町で宣教しました。4 節に「そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく」と、再びこの世が称賛する方法を取らなかったことが述べられます。そんなパウロだったため、Ⅱコリント 10 章 10 節を見ると、コリントでは次のようにも言われたようです。「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない。」　ところがそんな彼の宣教によって何が示されたでしょうか。4 節後半に「御霊と御力の現れ」とあります。これは具体的にはコリント人たちの回心を指すと考えられます。コリント人たちは分派争いをしていたこの時、弱く、恐れおののく人ではなく、力と自信に満ちた雄弁家を高く評価していました。そして 4 節にあるような「説得力のある知恵のことば」を駆使して話す人を高く評価しました。ところがパウロはそのどちらでもありませんでした。コリント滞在時のパウロは弱く、恐れおののいていたことをコリント人は知っています。またその話す言葉はいわゆる説得力のある知恵のことばではありませんでした。彼が話していたのは世が愚かと見なすキリストの十字架をストレートに話すというものでした。しかしそこに神の力、御霊の力が現れました。すなわち自分たちの回心が導かれました。人間の知恵ある言葉や技術に信頼するよりも、自らの弱さを覚えつつも十字架の福音に思いを定めて、ひたすらこれを説くパウロを通して！です。

5 節に「それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです」とあります。もしパウロがこの世の知恵のことばや巧みな話術によって彼らを導いたなら、コリント人たちはもっとすぐれた雄弁家が現れて何かを教えたら、そちらに簡単に乗り移って行くことになるでしょう。その場合、彼らの信仰は人間の知恵に基づくものであり、従って移ろいやすく、頼りないものであるこ

とを意味します。しかし実際の彼らは御霊の働きの現れとして信仰を持つ者とされました。神の力によって信仰へ導かれました。これこそ堅固なものです。神の働きに根差しているからです。このようにパウロの十字架のメッセージを接し、また弱いパウロを通して救いにあずかった彼らなのに、どうして今になってそれとは異なるスタンスに立とうとするのか。神の知恵とは相容れない、この世の知恵に立とうとするのか。もう一度自分たちの立つべきところを確かめ、神の知恵により頼む者であるように！とパウロは語っているわけです。

以上のことからまとめとして二つのことを述べたいと思います。一つ目は何が私たちの福音宣教の中心なのかということについてです。私たちはなるべく多くの方々に、福音が差し示す救いを受け取ってほしいと願います。その思いのあまり、人々が喜ぶことは何かを第一に考えて、それを追求して宣教しようとするのでしょうか。世が素晴らしいと賛同し、評価してくれそうなことをもって宣教するのでしょうか。しかしそういう姿勢は世が嫌悪感を示すであろう十字架を遠くに追いやり、これを空しいものとする方向へ進むことにならないかという警告をここから受けます。福音の中心はやはり十字架につけられたキリストです。イエス様はただ単に良い人間になるためのヒントとか、あるいは良い生活を送るための道徳を教えに来られたのではありません。イエス様が来たのは、私たち罪人の身代わりに十字架上で御自身の命をささげ、信じる者たちに罪の赦しと新しい命、新しい生を与えるためです。この十字架を薄めたら、それは福音になりません。もちろんこれは十字架以外は何も語らないということではありません。復活のこと、その他の救いの祝福について語って良いのですし、また語るべきです。しかしそのメッセージは十字架に焦点が合い、十字架の力を浮かび上がらせるものでなければなりません。パウロは十字架につけられたキリストのほかには何も知るまいと決心したと言いました。キリストの十字架にとどまり、これこそを思い巡らし、これを感謝するところから、彼のすべての生活と言葉、また宣教の働きが出て来ました。そこに神の知恵、神の力が現されました。たとえ人々から愚かと見られても、「神の愚かさは人よりも賢い」と 1 章 25 節で言われました。このことを私たちは改めて心に刻みたいと思います。

そしてもう一つは福音を伝える私たちは弱さを覚え、恐れおののいていて良いということです。世が称賛するような自信に満ちた人間、自らに関心を引き付ける人間にならなくて良い。雄弁家でなくて良い。もちろんだからと言って、話す際に何の準備

もいらないというわけではありません。より良い話し方について研究する必要はないということではありません。それらの準備や研究は良いことです。しかしそれらに頼ることをしない。それらが神の働きの鍵とは考えない。色々な技術の改善また向上を図って良いのですが、また図るべきですが、私たちが真に望みを置くべきは神です。神は不十分な者を用いてくださいます。ですから自分の知恵や力や技術に頼るのではなく、絶えず神に祈り、神に頼って、神の働きに当たる者でありたいと思います。神はこの世が愚かと判断する十字架の福音を通して救いの御業を進められるのと同様、この世から見れば愚かで使い物にならないと判断される者たちを用いて御自身の御業を進められます。この神の知恵と神の方法を覚えて、パウロのように福音のエッセンスであるキリストの十字架をいつも思い、これを大切にし、私たちのすべての生活とことばが十字架につけられたキリストとの交わりと感謝から導かれるものでありますように。そして神は御自身に信頼する弱い者たちを通してむしろ力強くご自身の力を現してくださることを見上げて、自らをささげ、神に用いられる幸いと光栄に歩む者たちとさせられたく思います。